

第 80 回公開シンポジウム

子育て・子育ての基本について考える ～アタッチメントと子どもの社会性の発達～

◆ プレゼンター

遠 藤 利 彦

東京大学大学院教育学研究科准教授／発達心理学・感情心理学

◆ パネリスト

小 林 登

東京大学名誉教授・日本子ども学会理事長／小児科学

◆ 司 会

一 色 伸 夫

甲南女子大学総合子ども学科教授／子どもメディア学

一色：第 80 回子ども学公開シンポジウムを始めます。本日のテーマは「子育て・子育ての基本について考える～アタッチメントと子どもの社会性の発達～」です。近年、社会性を始めとする子どもの種々の心の発達において、養育者あるいは保育者・教師等と子どもとのアタッチメントが果たす重要な役割に対して、多大な関心が寄せられてきています。今回は、そのアタッチメントということの中核にして、それが真に意味するところは何か、またなぜ重要なのかを概説しながら、子育てと子育ての基本について考えてみたいと思います。今日は、お二人の先生に東京からおいでいただきました。基調講演は、遠藤利彦先生です。遠藤先生の簡単なご略歴を申し上げます。東京大学大学院教育学研究科博士課程を卒業されて、聖心女子大学、九州大学そして京都大学を歴任されて、その後、東京大学大学院教育学研究科准教授をされています。先生のご専門は、発達心理学、感情心理学で特に親子関係、家族関係、子どもの社会情緒的発達との関係性を研究されて、実際に保育現場に数多く行かれている先生です。それから、今日のパネリストは小林登先生においでいただいています。小林登先生は、1998 年から 2 年間本学の教員として教壇に立っていただいた方でその時にこの子ども学が生まれました。国際子ども学研究センターの初代の所長で、子ども学の生みの親です。子ども学という言葉は小林先生が命名されて、日本で始めて子ども学が生まれたのがこの甲南女子大学ということです。それで、皆さん方は、総合子ども学科の学生で、今、幼稚園、保育園、小学校の教員の資格を取って将来は、その方面を目指す学生が多くいるので、しっかりお二人のお話をきいてください。では、遠藤先生お願いいたします。

遠藤：遠藤です。過分なご紹介をいただきまして、大変恐縮しております。私の方から今日、お話をさせていただきますのは、子育て・子育ての基本について考えるということで、特にアタッチメントと子どもの社会性の発達に関して、簡単に話題提供ができればいいかなと思っております。元々、私は、どのようなことに関心を持っているかということですが、子育て、親子関係と子どもの発達について、と

でも簡単に言ってしまうと、どんなふうに育てられるとどんな子どもになるのかということについて素朴な関心を持って細々と研究してきました。特に親子関係とか家族関係を考える時に、アタッチメントという言葉の一つのキーワードにしています。そして、そのアタッチメントというものが、どういう要因によって影響を受けるのかについて、特に、自分自身が自分の親からどんなふうに育てられてきたのかということにまつわるいろいろな記憶や感情が、今度は、自分が子育てをする時になって、そこにどのように反映されていくのかということに関して、研究をしてきています。また、そのような研究テーマの傍らで、少し実践的なこととしては、保育や療育の現場において、発達支援、巡回相談などをさせていただきながら、直に子どもさんと接し、また保育者の方とお話をさせていただく機会をそれなりに持ってきております。

では、なぜ、元々私が親子関係や子どもの発達に関心を持つようになったのか。最初に子どもはおもしろい、不思議だと思ったのは、スヌーピーが出てくるピーナッツという漫画にライナスという少年が出てきます。ライナスという少年は、いつもこのような毛布を引きずって歩いています。何かにおっかなびっくりした時やちょっと寂しくなったりした時に、必ずこの毛布を取り出して、顔をうずめたり、それをちょっと吸ったりして、自分の気持ちを落ち着かせようとする。世界的にライナスの毛布として知られていたりします。実際は毛布ばかりではなくてタオルであったりハンカチ、ガーゼであったり、あるいは柔らかいぬいぐるみであったりします。もしかすると皆さんの中にもこのようなものを持っていた人がいるかもしれません。自分に記憶がなくても、お父さんお母さんに聞いてみると、小さい時にこれを持って放さなくてたいへんだったという話を聞くことができるかもしれません。もし、心当たりのない方は、お父さんお母さんに聞いてみるといいかと思います。このライナスの毛布、本当は、これについて話をする時間が足りないくらい面白い現象だったりするのです。今日は、このライナスの毛布について話をする時間はありませんが、ただ、私がこれに関心を持ったのは、持つ子どもがいる一方で、このようなものを全く必要としない子どももいるということです。なぜ、ある子どもは、ぼろぼろになって時々異臭を発するようになるまで、こうした毛布やタオルを持って放さなくなるのに対して、別の子どもは何も持たなくても平気、このような個人差がなぜ生じてくるのか。もしかすると、それぞれの子どもさんが育っている家庭環境とか経験している親子関係に何か関連があるかもしれない。それで、そのことを調べてみたいということで、発達心理学の世界に入ってきました。



実は、このライナスの毛布は、専門的な言葉では移行対象といいます。本来、なぜこのような言い方をするのかも説明しなければならないのですが、今日は時間がなくて、お話できません。ただ、この移行対象という言葉を最初に使った有名な研究者に、ウィニコットというイギリスの児童精神科医で小児科医であった世界的に知られる研究者、臨床実践家がおられます。このウィニコットさんはライナ

スの毛布は、子どもが発達していく上でとても大切な働きをすることを言い始めたわけですが、この人は、ライナスの毛布、移行対象に関して、いろいろ考える一方で、子どもの発達にとって必要な子育ての要件は何なのか。これについてもいろいろと考察をしています。この人が言うには、子育てにおいて大切なことが2つある。気をつけることは2つでいいと言うのです。その一つは、原初的な没頭状態に浸りきること。これは少し難しい言い方ですが、子どもを持ったばかりの親御さん、特にお母さんは生後数カ月ぐらいまでの赤ちゃんに対しては、周りのことが見えないうくらい赤ちゃんに夢中になってしまう。没頭してしまう状態がごく普通にある。この人は、変な言い方ですが、それは正常な病気のようなものだと言っています。皆がなる病気のようなもので、他のものに関心が向かなくなつて、赤ちゃんばかりに注意が集中してしまう状態がある。それは、ごく普通のことで、実は、その状態に浸りきっていれば、赤ちゃんの発達に必要なことが自然にできてしまうと言うのです。

二つ目は、でもその没頭状態にずっと浸りきってはいけません。あるいは、大概の場合は、浸りきっていることができない。なぜかという、子どもがどんどん大きくなる。大きくなると子どもがあれをして欲しい、これいやだなどと、いろいろな要求をどんどんと親の方に向けてくる。だから、当然それを全部は叶えられなくなってくるし、親は親の方でこのテレビも見たいし、買い物にも行きたいし、お友達とも話をしたいと、自分自身の関心を取り戻し始める。そうすると、子どもにばかりそんなに夢中になっていられない。でもそれはそれでいい。徐々にこの夢中になっている状態から抜け出ていく中で、やはり子どもの発達に必要なことがごく自然にできる。

この一つ目から二つ目へと移るプロセスを言い換えると何か。最初は錯覚、これは、通常あまりいい意味では使われません。事実を誤って認識していたり、やや過剰に思い込んでいたりすることを錯覚というのですが、ウィニコットさんに言わせれば、小さい赤ちゃんを目の前にした時の大人は、赤ちゃんに夢中になって、赤ちゃんがこんなことを感じているのではないかと、自分にこんなことを言いたいのではないかと、教えたいのではないかと。赤ちゃんの気持ちというものを、やや過剰に読み込んでいく。まさに錯覚する存在である。しかし、その後、この没頭状態、夢中な状態、つまりは錯覚から、自然に抜け出ていく。それが脱錯覚ということです。この錯覚から脱錯覚へ至るプロセスの中で、赤ちゃんの子育ちに必要な子育てというのが、ごく自然にできるようになるのではないかと。そのようなことをこのウィニコットさんは言っているのです。

• D. W. ウィニコット

• 子育てにおいて大切なこと2つ

①原初的な没頭状態に浸りきること

②その状態から徐々に抜け出ること

「錯覚」→「脱錯覚」

ジョイントネス / アタッチメント

今日は、その錯覚から脱錯覚に至るプロセスを特にジョイントネスとアタッチメントという言葉 키워드にしてお話をしたいと思っています。では、このジョイントネスとアタッチメントとは何か。ジョイントは、ジョイント・コンサートなど、日本でも良く使われる単語です。ジョイント (Jointness) は、元々繋がること。一方、アタッチメント (Attachment) は、アタッチすること、くっつくことです。繋がることとくっつく。両方とも似たような意味だと思っている方もいるかと思いますが、でも、ここでは少し違う意味

で用いたいと思います。ジョイントネスは、誰ということに関わらず、人一般に対して繋がろうとすること。周りに人がいたら、人について関心を向けてしまう。そのようなことをここではジョイントネスという言葉でいっておきます。それに対してアタッチメントは、人一般ということではなくて、特定の誰か、お母さん、特定の保育士の先生など、特別な誰かに対してくっつくこととすること、くっつき続けようとする。それを意味する言葉として、この言葉を使いたいと思います。では、なぜジョイントネスとアタッチメントが大切なのか。

まず、「発達の呼び水としてのジョイントネス」のお話をさせていただきたいと思います。呼び水、誘い水、それがあるとごく自然にその後、水が流れ込んで、望ましい状態になっていく。そのようなことをイメージしていただければいいかと思います。副題として楽しい「錯覚」に浸ることの大切さがあります。では、このジョイントネスとは何か。もう少し、学問的に言うと、ジョイントネスというのは、お互いに感応し合い、感じて応答することです。我々は、友達と話をしたり、見つめ合ったりすると、つい感情的に揺さぶられて、そして、それに反応してしまうことがあります。そのようなことをイメージしていただければいいかと思います。互いに感応し合い、情緒的に繋がる状態とある。これがジョイントネスです。このジョイントネスが、先ほど言ったように発達の呼び水としての役割、具体的には、特に小さい赤ちゃんが大人がジョイントする、つまり、お互いに感応し合い、情緒的に繋がる中で、徐々に社会的な脳と心が出来上がっていく。

・ジョイントネス(JOINTNESS)

互いに感応し合い、情緒的につながる状態

→発達の呼び水としての役割

社会的な脳と心を徐々に作り上げる

→その失調が招く発達事態

社会的入力不足が引き起こす発達の問題
(→自閉症や早産児・低体重出生児等)

社会的というのは、難しいかもしれません。英語ではソーシャルということですが、心理学では、ソーシャルとか社会的といった時には、これは人間関係に関するという意味です。人と関わる際の脳の仕組み、この人は今、こんなことを思っている、この表情はこれを意味している。我々は日常的に人間関係の中でそういったことを読み取りながら生活しているわけですが、そのための脳と心の仕組みを、ジョイントネスを通して、作り上げていく。逆に言えばこのジョイントネスが、最初の段階であまりうまく働かない時には、いろいろな発達上の問題が生じてくるかもしれない。最近では、例えば、自閉症とか早産で生まれてくる子どもさん、低体重出生で生まれてくる子どもさんというのが、発達のプロセスの中で、結果的に持つことになるいろいろな問題が、このジョイントネスのちょっとした希薄さみたいところに関与していることもあるのではないかと議論もされています。このジョイントネスを考える上で、子どもの存在は、そもそも感応する存在、あるいは、感応させる存在である。感応させる人が周りにいると、つい感じて応答してしまうし、周りの人を感応させてしまう。子どもの近くにいる人は、子どもがいると思うだけで、ただではいられなくなってしまう。かわいらしくしょうがないとつい、目が釘付けになってしまいます。「感応する子ども」を分かりやすい言葉でいうと、赤ちゃんは人が大好き、学問的な言葉でいうと、社会的な知覚の仕組みがあるという言い方になります。具体的に何かというと、赤ちゃんは生まれてすぐに、いろいろなものが目に入り込む、耳に聞こえてくるなど、五感でいろいろな刺激

にふれます。いろいろな刺激が溢れているけれども、赤ちゃんは、その中で特に、人が発する刺激が大好きなのです。何よりも人の顔が大好きです。音声でいうと、人の声が大好きです。動きでいうと、人の動きが大好きです。ということは、周りに人がいると、赤ちゃんは、つい、人の方に視線を送って耳をそばだてている。そういう傾向を持っている。さらに、ただ見たり聞いたりするだけではなくて、学問的には、社会的共振、その周りの人の動き、声などに同調してしまう、共振してしまう。これは、情動伝染、一人の赤ちゃんが泣き始めると、その隣の赤ちゃんも泣き始める。あるいは、お母さんがとてもいらいらしていると、いつの間にかその感情の状態が子どもに移って、子どももむずかり、いらいらし始めるということがあります。赤ちゃんは早い段階から、いろいろな模倣ができるという話もありますし、他の人の言葉のパターンに自分の身体の調子をうまく合わせるような傾向を持っているとも言われています。この感應する子どもの性質というのは、裏返して考えると、実は、それ自体が他の人を感應させることになるわけです。

まず、それに関しては、赤ちゃんというのは、我々にとってただでさえかわいい、心理学ではそれを幼児図式と言います。赤ちゃんの顔と大人の顔は違います。赤ちゃんの顔はおでこがとても大きくて、あごが小さいです。目の縦幅が、例えばミッキーマウスのようにおでこが大きくてあごが小さい、目の縦幅が大きくて実は黒目がちだったりする。手足が短く、ずんぐりむっくりしている。身体全体が丸みを帯びています。さらには動きがぎこちない。このような一連の特徴が、我々大人にとっては、無条件的にかわいくてしょうがないと思ってしまう。元々、赤ちゃんは、ただでさえかわいい存在としてある。実は、かわいいからこそ、このようなキャラクターものには、赤ちゃんの特徴がふんだんに盛り込まれていると言えるわけです。ミッキーマウスは、初代のミッキーマウスはよりねずみっぽかった。しかし、時代が新しくなればなる程、どんどん赤ちゃんっぽくなってきた。なぜかという、赤ちゃんっぽい方が人気で。我々にとってその方がかわいらしいからです。

そして、そのただでさえかわいい赤ちゃんが、先ほどの社会的知覚の裏返しですが、周りに人がいると、人の方をつい見てしまう、社会的注視です。ただでさえかわいい赤ちゃんが周りに人がいるとその人の方をじっと見てくる。じっと見てきて、さらには、社会的な発信をする。「あー」とか「うー」とか、あるいは、ニコツとしたり、時々「ギャー」と泣いたり、いろいろな感情らしきものを浮かべてくる。実は視線は、我々のコミュニケーションにおいて、非常に重要です。日本語には、「目は口ほどにものを言う」という諺があったりしますが、人においては、目がコミュニケーション・ツールとして進化してきたと言われています。目の動きをみれば、その人が今何に対して注意を向けているか、それを知ることができます。目は、何に対して、その人が関心を持っているかという情報を発信してくる。それに対して表情、うれしそうな表情、悲しそうな表情は、人がどんな気持ちかを我々に教えてくれます。つまり、他の人が今視線をどこに向けているのか、さらにはどういう表情をしているのか、我々はそれらを見るだけで、その人が今、何に対して、何についてどんな気持ちを持っているかを理解することができます。人間の日常生活のコミュニケーションでは、言葉以上にこの視線と表情が果たしている役割が大きいのではないと言われることもあるくらいなのです。ただでさえかわいい赤ちゃんが、じっと自分の方を見つめてきて、「あー」とか「うー」とかニコツとする。これはどういうことか。赤ちゃんが自分に対してニコツ

としてきた。もし、お母さんが子どもから視線を向けられてニコッとされたりしたら、お母さんはどんなふうと思うか。この子は、「お母さんと一緒にいて嬉しいって言っている」などと思ってしまうかもしれない。あるいは、「ギャー」と泣き声をあげると、お母さんは、その赤ちゃんが「お母さんがいなくて寂しかったよと言っている」ように感じるかもしれない。

そして、先ほどの社会的共振、周りに人がいると、リズムカルにその調子に合わせてしまう。これは、大人側からすると、応答される、応答してもらえる。ただでさえかわいい赤ちゃんが、自分に視線を向けてきて、「あー」「うー」といろいろな表情をする。さらには、自分が何かをしてあげると、それに反応して赤ちゃんも身体を動かす。お母さんなどにしてみれば、まるで自分とコミュニケーションをしているかのように、赤ちゃんは振る舞うわけです。しかし、実のところ、こうした一連の行動、社会的注視、社会的発信、社会的共振などは、科学的にいうと赤ちゃんが意図的にやっているものではないと言われています。こうした周りに人がいると人に視線を向ける、同調してしまうのは、ほぼ、自動化された身体の仕組みだといわれています。しかし我々大人の方は、そんな受け止め方をしません。

これに関わるおもしろい話というのは、新生児がニコツとする現象、新生児微笑の話聞いたことがあるかと思います。新生児微笑は一般的には、赤ちゃんが眠っている時に頻繁に見られるものです。口元が引き上げられるので、赤ちゃんが笑っているように見える。けれども、新生児微笑の口元の引き上げは何かというと、眠っている時の神経の痙攣がここに現れている。これが科学的な真実です。けれども、これを見た周りの大人、特にお母さんやお父さんなどは「これは神経の痙攣に過ぎない」などと冷やかに思うかということ、おそらく絶対にそうは思いません。大概の大人、特に親は「この子は今、何の夢を見ているのかな」などと思ってしまうでしょう。でも、実は、そこがとても重要ではないかと言われているのです。そうした一連の赤ちゃんの特徴が他者の錯覚を誘い込む。その感応したり、感応させたりするのは、言い換えると、いかにもコミュニケーション好きな赤ちゃんを思わせる。こうした赤ちゃんの特徴は、特に養育者の錯覚を誘発する。このやや過剰に赤ちゃんの気持ちを読み込んでしまうということをここでは錯覚といっておきたいと思います。実態以上に赤ちゃんの感情や考え、そのようなものを、大人の方はつい読み取ってしまう傾向がある。逆に赤ちゃん側からいうと、赤ちゃんというのは、周囲にいる大人の関心を引き付けて、やや過剰に自分の心の状態があると見せかけて、さらに周りの大人から現にそれに応じた関わりを引き出してしまふ。そういったことが赤ちゃんにはあるのかもしれない。こうした赤ちゃんについて引き込まれていろいろなことを思ってしまうような大人を心理学では直感的育児といいます。直感的というのは、これまで何も学習していないのに、ついできてしまう、赤ちゃんの発達に必要なことがついできてしまう、そういう意味を持った言葉です。

さらに、最近心理学の文脈で使われる言葉で「Mind-Mindedness」という言葉があります。簡単に言えば心を気遣うという意味ですが、動詞の完了形になっているところに、この言葉の独特のニュアンスが含まれています。これは、ついつい、いつの間にか赤ちゃんの心を気遣ってしまっている傾向、意識して赤ちゃんの心を読み取ろうとすることよりは、赤ちゃんを目の前にすると、いつの間にか我々は、赤ちゃんの気持ちを読み取ってしまっている、気遣ってしまっている、そういう傾向のことを指して言っ

ているのです。最近、これらを持っていることが子育てにおいて、とても重要な役割を果たしているのではないかということが、様々な研究の中で言われています。

おそらく、これで一番大切なことは、そういう気持ちになれると楽しいということです。新生児微笑は、赤ちゃんのただの神経の痙攣ですが、そう思うよりは何か思い出して笑っていると思える方が楽しい。赤ちゃんにはそこまでの思考の能力も感情の力もないだろうと冷ややかに捉えるよりは、赤ちゃんが自分というらしいと言っているとか、お母さんがいなくて寂しかったと自分に泣いてきているなどと、ごくごく自然に思える方が圧倒的に楽しい。赤ちゃんと想像の中で対話、会話をしているような気持ちになれる。そうすると、さらに赤ちゃんにこんなことをしてあげようとかこれもしてあげようという育児に対する動機付けが増大していくことが考えられるのです。

他にもいろいろな側面において、錯覚とか「Mind-Mindedness」が重要な働きを持っていることが言われています。その中の特に具体的な研究をお話すると、これは、今、愛知淑徳大学で先生をされている篠原郁子先生が、この方はかつて、自分のところの大学院生だったのですが、この方が「Mind-Mindedness」の実証的な研究をされています。研究内容は、まず生後6カ月の赤ちゃんの40人ぐらいのお母さんに自分の子ども以外のたくさんの子どもの映像映っているビデオ刺激を見せます。そのビデオ刺激の中でいろいろな赤ちゃんがいろいろなことをしているのですが、お母さん達には、その時々そのビデオの中の赤ちゃんがどんなことを思っているのか、どんなことを考えているのか、何をしようとしているのか、こうしたことを自由に語ってもらうのです。そのようなことを通して、「Mind-Mindedness」がどれぐらいあるか、つまりは赤ちゃんの気持ちに引き込まれて、赤ちゃんの気持ちを代弁するような行動をどれくらいするのか、それを測定していくと、かなりお母さんの中でもそれが多い人、少ない人がいることが分かってきました。そして、その篠原さんは、その後5年にわたって、そのお母さんと子どもを縦断的に追っていきました。その中で分かってきたことは、元々この「Mind-Mindedness」は、イギリスの女性のマインズさんという研究者が最初に言った言葉ですが、この「Mind-Mindedness」の個人差は、篠原郁子さんの研究によると、その後5年間にわたって一貫して、生後6カ月段階で、これが豊かだったお母さんは、自分の子どもとの相互作用において、特に心に絡む発話、嬉しい、悲しい、悔しい、何を思っているの、何を考えているの、そうした心に関わるような言葉を豊かに発するというのです。あるいは、子どもの視線、子どもが何を見ているかということに対する関わり方は大きく2つあります。一つは、視線追従、これは、赤ちゃんが見ているものに、自分、大人の視線を沿わせようとする。例えば、赤ちゃんがペットボトルを見ていると、何でそれが面白いのと大人もそれを見る。もう一つは、視点転換、「ペットボトルなんてみても面白くないでしょ、こっちのおもちゃの方が面白いよ」などと言って、大人主導に別のものに注意を転換させようとする。しかしこの「Mind-Mindedness」が豊かなお母さんは、心に絡む発話が多い上に、視線追従、赤ちゃんの視線に自分の注意を沿わせようとする事が多いことが明らかになっています。

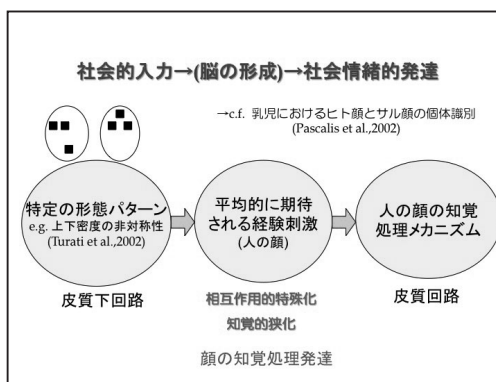
また、この「Mind-Mindedness」を提唱したマインズさん自身も、やはり縦断研究を行っていて、子どもが4歳、5歳になった時の、心理学では時々「心の理論」というものへの影響をみています。この場合の「理論」とは、学問的な意味での理論ではなくて、素朴な理論、誰もが持っている心の性

質や、働きに関する思い込みを指して言います。我々は、ごくごく素朴に人には心がある。それを信じて疑わないわけですが、そうしたレベルの話です。例えば、自分の心、自分が考えていることと、他の人が考えていることは違うという当たり前のこと、そういった心の性質や働きに関するごく普通の思い込みを、赤ちゃんは何歳ぐらいから持てるのか。そのような研究があるのですが、実はこの「Mind-Mindedness」が豊かなお母さんの下で育った子どもは、幼児段階での「心の理論」の発達、言い換えれば、自分の心、他の人の心を理解する力、この発達がより優れる傾向があった。そのようなことが実際の研究の中で明らかになってきています。

今は親の錯覚を絡めての子どもの発達に、このジョイントネスがどれだけ重要なのかという話をしたわけですが、実はこのジョイントネスというのは、ただ、錯覚を介してのみ重要であるわけではありません。ただ単純に赤ちゃんが人に対して関心を持ってみたり、聞いたりしているだけで、実は、その後、人と関わるために必要な力が身についていくという話もあるのです。実は、先ほど、生まれてきたばかりの赤ちゃんも人の顔が大好きだという話をしまし

た。しかし、これは正確には、少し違います。人の顔そのものが好きというよりは、こういう形が好きなのです。こういう形とは、このような楕円形だった時に上と下を分けて考えると、これだと上に2つ四角があって、下に一つ、これですと、上の方に3つ偏っていて、下には何も無い。要するに上下に分けた時に、上の方にたくさんものが集中して密度が高い。こういった形を赤ちゃんは、好むに過ぎないのではないかと研究していくと分かってきました。だから、少なくとも最初のうちは、別に人の顔そのものが好きなわけではなさそうなのです。でも、実際に赤ちゃんの生活環境を見ていった時に、こういった楕円形で、上の方の密度が高いものという、一番それに該当するのは結局のところ、人の顔になる。だから、結果的には、赤ちゃんは人の顔をいっぱい見ることになる。いっぱい赤ちゃんの顔を見ていく内に、人の顔を知覚したり、それを理解したりするための特別な脳のしくみ、心の仕組みが、赤ちゃんの中に出来上がってくる。知覚の中で人の顔に接することで出来上がってくる。そういうことが最近の脳研究の中で明らかになっています。

このように、赤ちゃんは人の顔を見る、或いは人の声を聞く。その中で必要なものをごく自然に身につけていく。しかし、赤ちゃんの周りにいる大人、人は、ただ見られたり、聞かれたりするだけではないはずです。当然、赤ちゃんに対して、実は自らも反応してしまうでしょう。最近、このジョイントネスとの関連で非常に注目されているのは、もしかしたら、赤ちゃんの周りにいる大人は、赤ちゃんにとって鏡のような役割を果たしているのではないかとことです。鏡のような役割を果たすとは、赤ちゃんが感じていること、身体の中で起こっていることなどを、周りの大人が、自分も似たような表情や声の調子になって、それを赤ちゃんに対して伝えるということです。例えば、私たち、特にお母さんのような存在は、子どもが痛がっていたりすると、自分もまた痛いような気持ちになって顔をゆがめたりす

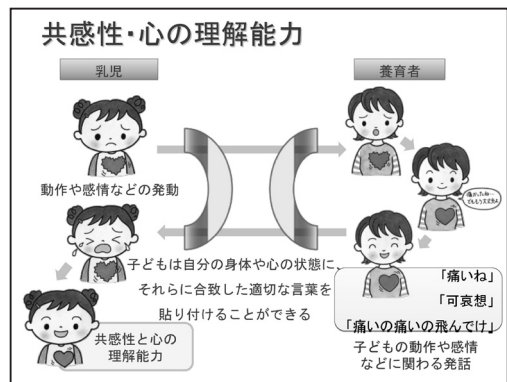


るものですが、こうした鏡としての大人の役割というのが、子どもの発達にはとても大きいのではないかと思います。

実は、最近の脳神経学の中でミラーニューロンの話がよく出てきます。ミラーニューロンとは、元々、サルの研究から始まったものですが、言ってみれば、例えば、我々が、今、友達が転びそうになっているところを見て「あっ、危ない」という反応している時の脳の中の神経細胞は、自分が転びそうになってヤバイと思っている時に使われている神経細胞そのものであるという話です。要するに自分が何かをしようとしている時に使われる神経が同じ行動をしている人を見た時にも使われている。それが何を意味しているかという、他の人の気持ちが自分のことのように体験されている、そういった性質を持った神経組織、ミラーニューロンというものがあるのではないかと注目されているのです。このミラーニューロンは、つい人と同じような気持ちになってしまう共感性、例えば他の人の痛みが自分の痛みのように感じられてしまう傾向の基盤をなしている可能性が高いと言われています。

しかし、このミラーニューロンは赤ちゃんの段階からすべて備わっているのかというと、そうではないのではないか。ある研究者たちは、このミラーニューロンの少なくとも一部のものは、発達の過程の中で徐々に出来上がってくるものだと考えたほうが良いと言っています。では、どのようにして出来上がってくるのか。実は、それこそ、先ほど述べた社会的な鏡としての養育者によって、自分の状態を映し出してもらうことを通して、このミラーニューロンが出来上がってくるという考えがあるのです。

この図を見ていただくと、赤ちゃんが動作や感情などを痛そうとか寂しそうな表情をしていたりすると、つい、お母さんの顔も眉間にしわを寄せて、一瞬同じような顔かたちを作ってしまう。しかし、その後で、「痛かったね、でも大丈夫」と言って赤ちゃんをなだめていくというのがごく日常的になされている。一つは、同じような表情を子どもに返している。子どもにそのような表情を返した上で、きちんと慰めている。そういうことを我々大人は、意識しない内に自然にやっているところがある。実は、これがとても重要ではないかということです。さらに、ただ、同じ表情をするだけで、そこで「痛かったね」とか「かわいそうだね」という言葉をそこに織り交ぜられることを通して、徐々に子どもは今の自分の気持ち、痛いのだ、うれしいのだ、寂しいのだ、そこに自分の気持ちにあった言葉を貼り付けていくことができる。そして、それが実は子どもの心の理解の力、また翻って、他の人の気持ちの理解の力につながっていくのではないと言われるようになってきています。それこそジョイントネスの中でそれが育つ。お母さん、お父さん、保育士さん、そして皆さんもまた、きっと小さい赤ちゃんを目の前にした時には、つい、赤ちゃんと同じような表情をしたり、同じような声の調子になったりすることでしょう。それが実は発達のには、とても重要なことかもしれない。



これは、ある人の研究なのですが、初めて注射される赤ちゃんに対して、その隣にいるお母さんがどのような反応をするかという研究があります。お母さんの反応は大きく3つのパターンに分かれました。

1番目は、自らは何もしない「大丈夫よ」といって、赤ちゃんの気をすぐに逸らそうとするお母さん。お母さん自身は、あまり動じずに、ただ子どもの気を逸らそうとするお母さんというタイプです。2番目は、赤ちゃんと同じような表情になりながら、その痛そうな、辛そうな表情になりながら「こっちのおもちや見て」などと気を逸らそうとするお母さんのタイプです。そして3番目は赤ちゃんの怒りや恐れに巻き込まれ、お母さん自身がとても動揺してしまうタイプ。大きくこの3つに分かれる。では、どの赤ちゃんが一番泣き止むのが早かったのか。これは、想像がつくかと思いますが、2番目の赤ちゃんです。赤ちゃんと同じような表情になりながら気を逸らすことができる。これが意味するのは、ただ私は強い人、だから弱いあなたを守ってあげるというスタンスで、ただなだめてあげるということではなくて、子どもに共感をしながら、子どもをなだめる、感情を調節することが、とても重要だということです。最近、心理学の中では、そういうところが強調されているように思います。これを時々「包容」ということばで言うことがあります。赤ちゃんが自らの感情に翻弄されないようにそれを柔らかに包み込み、それに意味を与えながら慰める。それが大切なのではないかと思います。

このジョイントネスは、比較的早い段階の赤ちゃんとその周りにいる大人、例えばお母さん、お父さん、保育士の先生などの大人との関わりというものをイメージして考えていただければわかりやすいものと言えるかと思います。しかし、このジョイントネスが発達の呼び水だとしたら、この後、子どもの人間関係というのは、特定の替えのきかない人に対して徐々に絞られていきます。家庭ではお母さん、保育所ではこの保育士さんでないと駄目というように、人間関係が絞り込まれる。つまり、アタッチメントというものが徐々に重要性を増していくのです。

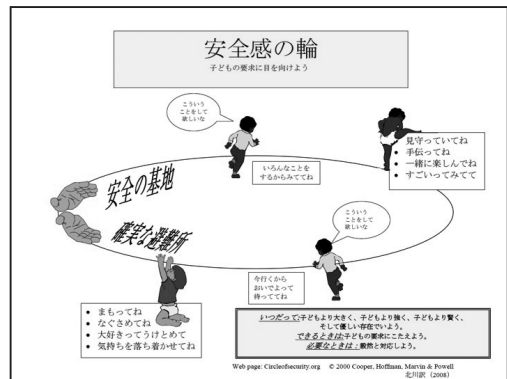
ここからは、発達のゆりかごとしてのアタッチメントについて考えていきましょう。アタッチメントとは、先ほども言いましたが、くっつくことです。但し、この場合のくっつくは、時所構わず、誰彼構わずくっつくことを意味している言葉ではありません。アタッチメントとは、学問的に言うと、何らかの危機に接したとき、あるいは、危機が予期された時に誰かにくっつくこと。危機と言うととても大袈裟ですが、子どもの日常は危機だらけです。躓いて転んだら危機、暗くなったら危機、自分の思い通りにならなければ危機、もう危機だらけ、その度ごとに子どもは怖くなったり不安になったり、フラストレーション、いらいらしたりと、様々なネガティブな感情を経験します。そういうネガティブな感情を特定の人一般ということではなく、お母さんなど、その特定の人に対するくっつきを通して、調整しようとする欲求。また、具体的にくっつくという行動の傾向、それを指しているのがアタッチメントです。それは言い換えると、一人の感情の崩れ、子どもの側に生じた感情の崩れを、二人の関係、お母さんなどとの関係を通して調整しようとするような心の仕組みではないかということです。当然、怖くてしょうがない時に守ってもらえた。声を上げた時にお母さんが駆けつけて抱っこしてくれた。そうしたら、安全感、安心感、大丈夫という気持ちに浸れるわけです。さらにそれが何回も続く、自分が怖くなってギャンと声を上げたら、必ずお母さんが来て、助けてくれた、その経験の蓄積を通して、何回もそれがあると、自分が声を挙げれば保護してもらえるという確かな見通しを持つことができるようになる。自分は守ってもらえるのだ、危ない時は、きちんと声を上げれば、お母さんが来て守ってくれるのだ。これは言い換えると絶対的な信頼の感覚です。アタッチメントをととても平たくいうと、怖くてしょうがない時に無条件的に守っ

てもらえる人に我々は全幅の信頼を寄せるようになるということかもしれません。怖くて怖くてしょうがない時は、一番危機的な状態です。そこで手を差し伸べてくれる人に対して、ごく素朴に素直に信頼の感覚を持つようになる。そういうことを幼い時に経験しておくことが重要ではないかと思います。そして保護してもらえることに対しての確かな見通し。少々危ないことがあっても、絶対その時は、あの人が必ず来てくれるから大丈夫という見通しの下で、情緒的な絆が生まれる。そして、それが一度出来上がると、他者と心理的につながりながら独り立ちをしていく。アタッチメント、くっつくという言葉から、時々、それが、べったりくっつくこと、お母さんや保育士さんにただ依存している状態を思わせるかもしれません。でも、アタッチメントは、この依存性とは全く逆の意味です。アタッチメント、心理的につながっているからこそ、独り立ちができるようになる。それはどういうことかという、結局、危なくなったら、あそこに戻ればいい、危なくなったら助けてもらえるから大丈夫、だったら、あちこち出かけて行ってもっと遊ぼう、もっといろいろなことをしてみよう。心理的なつながりができてからこそ、我々は自律的に独り立ちをしてきちんと一人で行動できるようになった。アタッチメントは依存性とは間逆の、むしろ自律性という、これを促すものと認識されています。二者関係を通した自律的な個人の発達、これを問題にするのがアタッチメントという考え方です。

• Attachment = くっつくこと

- 何らかの危機に接した時あるいは危機が予期された時に生じる恐れや不安などのネガティブな感情を、特定の他者に対するくっつきを通して調整しようとする欲求および行動の傾向
- 一人の感情の崩れを二人の関係によって調整
外界と内界の間にあって「緩衝帯」として機能
→ 安全感 + 保護してもらえることに対する確かな見通し
→ 情緒的絆 → 他者と心理的につながりながら独り立ち
二者関係を通した自律的な「個」の発達

では、このアタッチメントをもう少し深く考えていただくために、「安全感」の輪という輪についてお話しします。ここに輪があって、左側にあるのが安全の基地です。もう一つここに確実な避難所。つまり、これらは子どもにとって大切な大人です。お母さん、学校の先生、保育所の先生かもしれません。この大人がいて、子どもは、この大人を安全基地、拠点として元気よく飛び出していく。そして、いろいろなものを見たり、聞いたり、触ったり、口に入れたりして、いろいろなことにチャレンジをする。探索活動といいますが、遊びそのものです。元気よく遊んで、いろいろなものを試している。実はこの遊びは、イコール学びです。自分からいろいろなものを試してみても理解する。子どもにとっての遊びはイコール学びです。



しかし、そのプロセスの中で、ちょっと後ろを向いたらお母さんがいない、やばい。夢中に遊んでいたら、真っ暗になってしまった、怖い。知らないおじさんがいる、怖い。子どもはこの輪の上で、時々恐れや不安、フラストレーションなど、いろいろなネガティブな感情を経験します。そうすると、今度はベクトルを逆にして、一転して、あそこに行けば大丈夫と避難所めがけて走りこんだり、まだ小さい赤ちゃんの時は、自分から「ギャー」と大きな声を上げたりして、とにかくこの確実な避難所に逃げ込も

うとする。特に目新しいことはありません。すべて当たり前のことです。言ってみれば、子どもの日常生活はこの輪の連続です。この輪が自然に円滑に回るためには何が必要か、これを問う考え方がアタッチメントと言ってもいいかもしれません。それこそ、子どもの日常はこの輪の連続であるということです。この輪がいかに自然に且つ確実に機能するかどうか、これが実は、子どもの健やかな発達の鍵になる。そして、子どもが大きくなって発達していくというとは何かというと、この安全感の輪っかが徐々に大きくなっていくことを意味しています。小さい赤ちゃんの頃は、それこそ輪はこれぐらいごくごく小さいものかもしれません。すぐ怖くなってお母さんの膝の上に乗っかる。でも2歳3歳になると少々のことでは、ここに戻らなくてもよくなる。さらに、小学校に上がる頃になると、この輪はもっと広がる。さらに中学校、高校になると、めったに親のもと、この避難所には帰ってこないかもしれない。大学生の皆さんもそんなに頻繁にお母さん、お父さんのところに戻らないかもしれない。でも、戻らないからといって、必要なくなったかという、そうではありません。皆さんご自身がお分かりだと思います。最後の最後、お母さんやお父さんは、自分のことを見捨てないという見通しがあるからこそ、一人でいろいろなことができていくところがあります。実は、この輪が大きくなっていくということが、イコール発達なのです。この輪が大きくなっていけるように大人が支えるということがとても重要なのです。

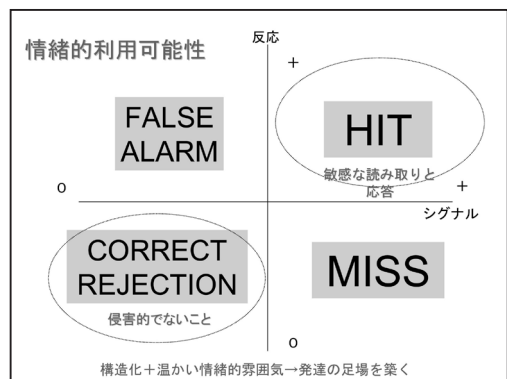
今日は時間がなくて、アタッチメントの個人差についてお話できるかどうかわかりませんが、本来、「基地」は、同じ所にあり続けるから基地の意味を持っています。あちらに行けば燃料補給ができるという見通しが成り立っているから基地の役割を果たすと言えるわけですが、例えば、お母さんがあちらこちらとフラつといなくなってしまう。そうすると、子どもの方は、お母さんがどこに行ってしまったか、また自分を置いてどこかに行ってしまうのではないかと、不安で不安でたまらなくなって、お母さんから離れられなくなってしまう。べったりとお母さんにくっついたまま、あるいは、執拗に後追いをするといったことが生じがちになります。あるいは、親子の中には、子どもが泣いて、親の方に戻って来ようとすればするほど、子どもが泣いている様子を嫌って、子どもから離れていこうとするような養育者の方も少数ながらいいます。子どもが泣いて戻って来ようとすると、もっと遠くに行ってしまう。だとしたら、子どもができることは、本当は、べったりくっついて守ってもらいたいけれども、自分が泣けば泣くほど、もっと遠くに行かれてしまう。だったら、泣かないでおこう。くっつかないでおこう。その方がまだ安心でいられるということで、自然に親との間に距離をおいてしまうという子どもさんもいます。そのようなことを考えると、この輪が、自然に回ること、それがとても大切なだと認識していただけるのではないかと思います。

この輪を確実に回していくために、何をしたらいいのか。その大人側の心構えの話をしたいと思います。情緒的利用可能性という考え方、英語では、「emotional availability」と言います。実は、発達心理学の領域では、かつては、子どもの発達に大人のどのような特徴が重要かといった時に、敏感であること、感受性がとても重要だといわれていました。感受性とは何かというと、子どものその気持ちを的確に読み取って、迅速に応答してあげること。これが感受性です。実は、この感受性というものと、子どもの望ましい発達との間には、かなり強い関連性があることが、明らかになっています。しかし、子育てや保育の実践の文脈、例えば、お母さんを目の前にして、あるいは、保育士さんを目の前にして、

とにかく子どもにとって、大人の感性がとにかく大切です。よなどはあまり言わなくなってきています。なぜかという、感性というのを強調すると、子どもが痛い思いをしないように、辛い思いをしなくてもいいようにと先回りして、子どもにそれこそネガティブな感情を経験させないようにする。それが大切だと勘違いされることが多い。そういう中で、この感性という言葉ではなくて、最近、情緒的利用可能性という言葉が使われるようになってきた。それはどういうことかという、大人はいつも子どもの状態を気にかけて、その後ろを心配してついて回るのではなくて、どっしりと構え、子どもが求めてきた時に、情緒的に利用可能な存在であればいい。アタッチメントの基本原則というのは、そういうことです。

先ほど申し上げましたが、子どもは一人で元気に飛び出していく。そこで嬉しい、楽しい、夢になる気持ちなどを体験する一方で、怖い思い、不安な思い、フラストレーション、いろいろなネガティブな感情を経験する。そして何とかしなければと思って、声を上げる、親の方に近づく。その時、子どもが求めてきた時にしっかりと基地の役割、避難所の役目を果たせるかどうか。ですから、子どもが転んではいけない、痛い思いをしてはいけないと子どもの後ろをついて回る、あるいは、先回りをして子どもが嫌な思いをしないでいいように振る舞うことをアタッチメントとは言いません。基本的には、まさに、子どもが求めてきた時に利用可能な存在であればいい。逆に言えば、特に必要とされない時は、子どもの活動に敢えて踏み込まない。侵害的でないことが重要だと言われるようになってきました。

これを簡単な図で見ていきたいと思います。これは、横軸は内的状態とシグナル。これは、子どもが何を感じているか、あるいはどういうふうなシグナル、泣いたり、声を上げたりしたか。した、しないということです。それに対して縦軸は、大人側がそれを読み取って応答したか。した、しないということです。この組み合わせで大きく4つに分けることができます。子どもが何かを感じている、お腹が空いてギャーと泣いた。ミルクが欲しいのだということで、ミルクを与える。当たり (HIT) です。これは一般的に感性と呼ばれ、大切です。ちなみに外れ (MISS)、お腹が空いて泣いたのに、それを見逃してしまいました。あるいは、まだお腹がすいているはずがないと勘違いして何もしてあげない。そして、こちらが誤ったあるいは行き過ぎた読み取り (FALSE ALARM)。これは、本当はそうではないけれども、やや過剰にこうじゃないかあじゃないかと読み取って、働きかけてしまうことで、発達の早い段階では、意外に大切だと言われることもあります。もう一つが (CORRECT REJECTION)、これは、元々はきっぱりとした拒絶という意味です。ここでの意味は、別に赤ちゃんがシグナルを向けてこないのだから、敢えて何もしないでおこう、子どもの活動に勝手に踏み込むようなことはしないということです。もちろん、これは、別に子どもに気をかけない、子どもを無視するというものではありません。見守るというスタンスで、後ろから応援団として子どもの活動を支えていましょうということです。実は、子どもが大きくなっていけばいく程、この (HIT) と共にこの (CORRECT REJECTION)、侵害しないことが重要になってくるのだと最近の発達心理学の中で



は言われてきているのです。もっと言うと、結局、侵害しない中で、子どもというのは、心のたくましさのようなもの、何か嫌なことがあったら、自分で立て直さなければ、助けてもらうために何をすればいいのだろうかといったことを考え、そして自ら動く力を備えるようになるのです。子どもが自立的に振る舞えるようになるためには、実は、あれやこれやと先回りをしてやってあげることよりも、じっと見守ることが必要ではないか。当たり前のことかもしれませんが、そのようなことが言われるようになってきています。

関係性の基本は、子どもがシグナルを送ってきたら応える。弱って帰ってきたら、情緒的に燃料補給をしてあげる。但し、養育者の方から、子どもが一人でやっていることに土足で踏み込むことは、極力しないでおく。しかしこれは、子どもを無視することではなくて、心理的には寄り添いつつ、離れたところから暖かく見守り、時折、声掛けなどをして子どもの自発的な活動を励ます、このようなスタンスがとても重要なのではないと言われるようになってきています。そして、実は、これが、最初の方で述べた「脱錯覚」ということに深く関連することなのです。

・子どもとの関係性の基本

- ・子どもがシグナルを送ってきたら応える
- ・弱って帰ってきたら情緒的に燃料補給してやる
- ・養育者の方から一方的に子どもが1人でやっていることに土足で踏み込むことを極力しない
- ・ただし(心理的には寄り添いつつ)離れたところから温かく見守り、時折、声かけなどをして子どもの自発的な活動を励ます(attunement)

最初は、つい赤ちゃんに夢中になってしまう。しかし、「脱錯覚」というのは、それこそ、子どもが今何をしたいのか、子ども自身の気持ち、自分に対して、今シグナルを向けてこないのだから、敢えて何もしないでおこうということであり、言ってみれば、子どもの心に直接向き合うようになっていくということを意味します。ああじゃないかこうじゃないといういろいろ想像する中で働きかけを行う「錯覚」の状態から覚めて、子ども自身の心、子どもが実際に感じていること、考えていること、シグナルを送ってきたことに対して向き合うということです。最初は、想像上の対話だったものが、今度は、実際に子どもが思っていること、感じていること、そしてシグナルとして向けてきたことに対して応える、実際の対話に変わっていくことが重要なのです。しかし、そのように言うと、自然にこれをうまく移行させていくのは、とても難しいことではないかと思われるかもしれませんが、実は、これは、先ほどのウィニコットさんが言っていることですが、ほどほどであれば、このような「錯覚」から「脱錯覚」への移行、想像の対話から実際の対話への移行というのはできる。ほどほどでいいのだ。言い換えれば、完璧でない方がいいのだ。完璧であってはいけないのだということです。

実は、最近の研究の中でこのようなことが分かってきています。うまくいっている親子関係、あるいは、子どもの発達をきちんと促す親子関係は、さぞかしお母さん、お父さんはしっかりといろいろなことを子どもにしてあげているのだらうと思ってしまいますのですが、実は、とてもミクロに観察をしていくと、うまくいっている親子関係においても、先ほどの(HIT)と(MISS)、当たりか外れかというところが、大体半々程度、あるいは、研究によっては3割ぐらいしか当たらないのではないかと言うのです。言ってみれば、大概大人は、外している。それが普通なのです。但し、重要なことは、外れは外れのままにしておかない。実は、最初から完璧に当たりを実現するよりは、むしろ、外して失敗した時にその後

どう修復するか。結局、読み取りを誤ると、お腹が空いているのに、それをやってあげずにおもちゃで遊んであげたりすると、子どもは、当然、それでは、泣き止みませんから、もっと泣きます。そして、親の方が「おもちゃじゃないんだ、あっそうか、ミルクか」と気づいてミルクをあげる。このように修復する中で実は、子どもの発達において重要なことが生じます。子どもは、きちんと待つことができるようになります。また、ネガティブな感情に耐えて、もっとシグナルを発しないとだめだ、自己主張しないとダメだ、結果的に自律性を身に付けることができるのです。子どもは、大人が少々外しても意外にそれを大目にみて、割り引いてくれるというのが最近の研究から分かってきています。しかし、重要なことは、外れを外れのままにしておかない。外したら、失敗したら、子どもからのシグナルを頼りに、何とか修復していく、それがどうも重要そうなのです。それはどういうことかということ、子どもを育てる共同パートナーとする、つまり、子どもにいろいろなことを教えてもらいながら、子どもにいろいろなことを主張させながら、自分も足りないところを補っていく。補っていく中で、親としての成長、保育士としての成長があるのではないか。そのようなことが最近の発達心理学の研究の中で少しずつ明らかになってきているのです。

ちょっと、言い切れなかったところもありますが、今日はここまでしておきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

一色: 遠藤先生、ありがとうございました。たいへんわかりやすく説明をしていただきました。それでは、小林先生、今の遠藤先生に対して、総合的、多角的にお話をいただければと思います。よろしくお願いいたします。

小林: 遠藤先生のすばらしいご講義を聞いて、勉強させていただきました。ありがとうございました。私が感想を述べるとすると、何を言えばいいのか迷ってしまうほど立派なお話でした。ただ、このように考えてはどうでしょうかということを申し上げます。

人間、我々の脳は、長い進化の歴史を経てできた脳を持っています。赤ちゃんは、その生まれた時に、人間進化の歴史の基本的なものはきちんと持っているのではないかと。脳がいつできたかということになると、脊椎動物になってから、脳はできたといわれています。脊椎動物というと、魚とかトカゲなどの動物の祖先になった時に、脳ができたと考えられています。そして、哺乳動物に進化し、原始的なタイプの哺乳動物から、だんだんと高等哺乳動物に進化して、そして、馬などが持っているようなデリケートな脳を持っている哺乳動物になり、そして、霊長類に進化して人間の脳ができたと考えているわけです。ですからそのような立派な脳の原型は、赤ちゃんは持って生まれてくるということをまず、考えなければいけないのではないかと思います。それをどういうふうを考えるか。最初は、心臓を動かすとか呼吸をするなどという生命を維持し、生きていくために体を動かすようなためだけの、体のプログラムのためだけの脳だったと考えるわけです。ですから、テレビで映っている大きなエイが口を開けて、小さな魚を食べてのんびり動いている姿を考えると、心臓は働いているし、水を出したり入れたりして酸素をとっていますから、そのように生命を維持するための体のプログラムと運動のための体のプログラムの脳に

進化している。原始的な哺乳動物になった時に、本能、情動、本能は、食欲、これは体をつくるため、性欲は、子孫を作るために、自分の持っている体のプログラムの働きを強くするためにできてきた脳です。それから、本能と情動が加わった脳を本能情動脳という言葉を使って説明しているのですが、そういう脳に進化してきた。それは何かというと、その最初の体のプログラムの働きを、そういう心のプログラムで強くして、そして生き残ってきたのです。そして、情動の中では、優しさなどは、地球上にいる動物の中で、人間の祖先は、牙もないし、戦おうとしたら弱いわけです。だから皆で仲良く集団で生きていかなければ生きていけなかったために、優しさとか愛情というような人間関係を結びつけるような心のプログラムが出てきた。もちろん、戦争をするために攻撃するとか怒り、怖れという心のプログラムも必要だった。その後に高等な哺乳動物になった時に、犬とか馬などの知性と理性の心のプログラムが加わって、たくましく生きていくだけではなくて、もっと上手く生活環境に対応し、集団生活をしていくために必要なものを上手く働かせるために知性・理性の脳ができたというように考えればいいのではないかと思います。ですから、その原型を赤ちゃんは持って生まれてきている。だから例えば、胎児の行動、新生児の行動を見ると、いろいろなところに、大人のやっていることの基本的な心のプログラムや体のプログラムが殆どあるのではないかと考えています。

例えば、先ほど、生まれたばかりの赤ちゃんが笑うというお話がありましたが、あれは、胎児もしています。ということは、胎児は、笑うという表情、笑うという心の状態は脳の中にはないかもしれない。しかし、笑うというような表情を作るプログラムは、何かあって、それにスイッチが入るから、赤ちゃんが笑うわけです。それをお母さんたちは、喜んで、錯覚してという言葉になるのですが、一生懸命子育てをするようになっておっしゃっていました。ですから、そのような基本的なこと、例えば胎児でも指を吸っている、なぜ指を吸うのか。吸うということは、生まれてからお母さんのお乳を飲むために必要なプログラムです。これは生きていくために絶対に必要なプログラムです。ですからそのようなものを持っているわけです。そのような基本的なものを持っているから、お父さんやお母さんは、先ほどの錯覚で言えば、騙されて夢中になって、育てるように仕組まれている。しかし、赤ちゃんの方にとっては、どういうことかということ、同時にもっと高度な脳の仕組み、つまり、知性とか理性の心のプログラム、本能とか情動の心のプログラムで、体を動かしているのです。そういう基本的なものを、お母さんやお父さんのやりとりの中で働かせながら、組み合わせているのだと思います。ですから、その次のステップとしてアタッチメントが出てくる。つまり、特定の人に結びつくという行動が出てくる。そのように理解をすればいいのではないかと思います。ですから、考えてみると、言葉などはないけれども、お母さんの語りかけるリズムやピッチ、そういう情報をきちんと赤ちゃんは理解をしていると思います。もちろん、我々が言うような理解ではなくて、もっと快・不快ぐらゐの感じかもしれませんが、そのようなもので理解して、受け止めていて、そういうものの繰り返しの途中で、段々と、他の知性や理性の心のプログラムと赤ちゃんの持っている基本的なプログラムが結びついている。ですから、胎児の時に笑う、生まれた赤ちゃんが産声の中で笑っている表情をする。これは、笑いではない、確かにそうです。しかし、笑いと同じような表情をつくる心のプログラムがあることだけは確かなのです。これは、どうしても認めざるを得ないのです。そして、それが、段々と、やっている内に知性・理性と結びついてくるから、小

学生になると漫画で笑う。高校生になると落語を聴いて笑う。落語を聴いて笑うのは、相当知性が高くなければ笑えないと思います。そのように考えると、非常に説明がしやすいのではないかと思います。以上です。

一色：小林先生、ありがとうございました。学生の方で何か質問、コメントあれば受け付けます。

学生 A：今日はどうもありがとうございました。とても話が細かくて質問ではなく感想になりますが、講義で聞いている内容をより深く知ることができました。やはり、実習などに行って、私も注意を受けましたが、自分にミスがあって、いらいらしていると、子どもに伝染してクラスの雰囲気が悪くなるという自分を自分で体験しましたので、先生のお話を聞いて、とても勉強になりました。

一色：他にいますか。

学生 B：今日は、お話をありがとうございました。子どもの安全基地の話でストレンジ・シチュエーションのことを考えながら聞かせていただきました。今日の錯覚から始まる親子の関係を聞いていると、錯覚から脱錯覚に向かうということは、多分、少子化の今であれば、より子どものことに関わる時間が親には多くなると思うので、脱錯覚というのは、現代では難しいのではないかと思います。また、昔の話でいうと、今とは違って、兄弟が多いですから、ジョイントとかアタッチメントは親と子の関係で、どれだけ成り立っていたのかと疑問が湧きました。本当に脱錯覚ができないからこそ、少し、見当違いのことを言っているかも知れませんが、ニートやパラサイトシングルにも繋がっていくのかと感じました。

遠藤：ご指摘ありがとうございます。まさに、ご質問してくださった通りのことが、もしかすると起きつつあるのかなと思います。やはり、錯覚できないということの問題。最近子育てに関して、このような方法がいいとか、これをやってあげることが子どもにとっていいのだ、ある意味、あればあるほど、子どもには、プラスに働くのだと、やってあげればやってあげるほど子どもの発達は引き上げられるのだということが言われがちのように思いますが、実際の研究の中で明らかになってきているのは、確かに著しく欠けると子どもの発達は、歪む、これは、確かな科学的事実です。ですが、いつの間にかテレビなどでは、それが反転させられて、たくさんやってあげればあげる程、子どもの力は引き上げられるのだという論理のすり替えが行われているのです。すると、あれもこれもやってあげなければという話になって、子ども自身を無視してしまって、親の気持ちが先走ってしまうことの弊害が最近やや多く出てきているのかと思うことがあります。

それと、ニートなどの青年期、思春期の問題ですが、本当は、時間があればその話もさせていただきたかったのですが、やはり、それもまた深刻化しているのだろうという気がします。

一色：どうもありがとうございました。これで第一部を終了します。第二部では、ディスカッションとい

う形でこのテーマを深めていきたいと思いますので、是非ご参加ください。

【休憩】

一色：では、ここから第二部を進めて参ります。第一部が基調講演の先生とパネリストの先生がお話されたところで終了いたしましたので、お二人の先生のお話をもう少し、深めていきたいと思います。パネリストの小林先生からは、長い歴史の進化のなかで3つ脳についてお話いただきました。このお話に対して、遠藤先生がお話になった部分はどのように意味付けをしたらいいのか教えていただきたいと思っています。

遠藤：小林先生、貴重なご意見をありがとうございます。先生がご紹介いただきました、脳の進化のお話は、我々心理学者にとっても、非常に有用なお話であって、私は発達心理学で、主に子どもの心の発達で、「心」を研究対象にしているのですが、最近はやはり、心を支えるものとしての脳の仕組み、これに目を向けないわけにはいなくなってきました。そして、脳の研究の中から明らかになってきていることは、やはり、子どもの心の発達は、一つには、長い進化、ヒトという生き物の進化という単位で考えていかなければいけない。実は、今日お話をさせていただきました中に、直感的育児という言葉を紹介させていただいたのですが、直感的育児とは、元々、発達心理学者の中でも、進化論の考え方をベースにした人が使っている言葉です。

「直感的」が意味するところは、学習とか経験に因らなくても、つい我々は赤ちゃんに接してしまうと赤ちゃんの発達に必要なことができてしまう仕組みを持っている。これを昔はマザーリーズ、母親言葉という言葉で言っていたりもしたのですが、我々大人は赤ちゃんを目の前にした時に、声の調子が高くなったりとか冗長になったりとか、短く区切って何回も同じことを言うなど、赤ちゃんに対して独特の語りかけをします。最近では、別にお母さんに限定されないということで、無理のある言葉ですが、ペアレンティーズ、親言葉と言われています。それなどは、世界共通の傾向として知られているのです。アメリカの大人の人も、中国の人も、あるいは、我々が知らない民族の大人の人も、基本的には、子どもを目の前にすると、言語は違っても、そのリズムとかアクセントとかイントネーションはほぼ共通の特徴を持っているのではないかとされているのです。これはあくまでも一つの例ですが、実は、学習や経験によらなくても、できてしまう養育行動、子育ての仕組みは、一定程度、我々、大人の人にはきちんと仕組みられているという考え方があると思います。

逆に言えば、深刻なのは、子育ての仕組みを持っていながら、上手く子育てができなくなってしまう。その事態が深刻化しているのかと思います。もっと言うと、頭でっかちになって、こういうことをしなければいけないのではないかとということばかり考えて子育てしてしまうということ、例えば偉い先生が何とかメソッドと言っていたので、それをしないといけないと考えて育児しようと躍起になるようなことが生じがちなのかもしれません。赤ちゃんをごく素朴に見ていると、自然に口に出てしまうことを、敢えてこれを言うてはいけないのではないかとと思って言わなくなったりしてしまうというようなこと、もしかすると、

そのような不自然なふるまいが多く生じてきていることも一つ考えなければいけないことなのかなと思います。直感的な育児という言葉と共に、共振化、子どもは子どもで自分が発達するための仕組みを持っている。これは小林先生がご指摘くださったように、まだ、きちんとした機能は持っていないくても、原型としての脳の仕組みや心の仕組みというのを胎児の段階から持っているというお話だったと思いますが、そういったものを持っていると同時に、それを促すように大人の方もそれにうまく適った子育ての仕組みを持っている。要するに、子育ての仕組み、子どもの育ちの仕組みと子育ての仕組みは、手を携えて共に進化してきた。上手く噛み合うように進化してきたというのが、あるのではないかと言われていて、それは具体的にどのようなものなのか。そのようなものを持ちながら、時々、親子関係がぎくしゃくしてしまうというのは、どういうことなのか。そうした観点からの研究も最近行われるようになってきています。

一色：実は、小林先生とは、私がNHK時代にいろいろな赤ちゃん番組を作っておりまして、その時に小林先生がおっしゃった話で今でも心に残っているのが、赤ちゃんの母親、父親に対する愛着と、親の赤ちゃんに対する愛情、それが上手く相互作用されて、赤ちゃんが健やかに育つというお話と共に、エンタレメントというようにお話を伺わせていただきました。今、遠藤先生のお話に対して、小林先生、何かございましたら、お願いいたします。

小林：学習がどれだけ子育てにとって重要かという、今の遠藤先生のコメントを伺っていて思ったのは、ジェーン・グドールさんに、チンパンジーは虐待をしますかと伺った時の答です。すると、彼女はしばらく考えて、虐待しますと答えました。それは、メスのチンパンジーで一番末っ子だとおっしゃったのです。子育てを見る機会がなくて、やり方を学ばなかったために、初めてできた赤ちゃんに対して、暴力を振るってしまう、投げ出してしまうということをする。しかし、そのようなメスのチンパンジーでも、妊娠を繰り返してくると、段々といいお母さんになるというのです。だから、学習の部分、赤ちゃんのプログラムもそうですが、親にも子育てするプログラムがあります。その代表の母乳分泌などは、女性の子育ての機能として極めて重要なプログラムで、それは、どんなお母さんでも普通の環境であれば、子どものお乳を吸う刺激によって、十分に母乳が出るようになる。けれども、そのような子育ての部分の中に、本能的といってもいいし、進化論というプログラムでやっているという考え方の部分と、どうしても学習の果たす役割も大きいということも考えなければいけないのではないかな。だから、今、中学生や高校生に赤ちゃんを抱かせるという経験は重要であると思います。もう一つ重要だと思うのは、使わない脳のプログラムは、駄目になってしまう。ヒューベルとウィーゼルの研究は、生まれたばかりの猫の目を縫って光を入れないと、視覚領域の脳の構造が変わるということを証明してノーベル賞をもらったのです。やはり、折角持っていても、現在の社会のようにいろいろな忙しい社会だと、女性が母親になっても子育てのプログラムが上手く動かないこともあるかもしれない。そのためには、少しぐらい練習をしておいた方がいいかもしれない。やはり、子育ての教育というのは重要であると思います。だから、中学校、高等学校に入って、そのような経験をするのは、文科省のカリキュラムでやればいいと思います。

確か鳥取県は、県全体でやっているのです。

一色：お二人の先生から、それが上手く噛み合わない虐待の話が出ましたが、その虐待というのは、今の時代多くなっていますけれども、一体どういうところが今の社会で問題になっているのでしょうか。

遠藤：虐待の問題は、もちろん深刻な問題なのですが、アタッチメントの観点から虐待を考える時に、虐待というと、子どもに対して暴力を振るう、その暴力の中には、タバコの火を押し当てるとか強く殴って骨折させてしまうなど、その身体的な暴力そのものが、子どもには非常に大きなトラウマ、心の傷になる。そういうところが強調されることがあるのですが、アタッチメントという考え方においては、実は、1回1回の身体的な暴力がどれくらい悲惨だったかということ以上に、そういった身体的な暴力が生じてしまう親子関係全般の歪みの方が子どもたちにとってもっと深刻ではないか。もっと言うと、実は、1回タバコの火を押し当てられて火傷をしてとても辛い思いをした子ども、でももちろんその辛い思いをしたこと自体が心の傷をもたらすということがありますが、実は最近もう一つ言われているのは、結局その傷が放ったらかしにされて、誰からもケアされないままになってしまうことの問題の方がもっと深刻なのではないか。結局、誰からも守ってもらえないことに繰り返しさらされてしまうことの方が、虐待の問題においては、一番考えられなければいけない問題であると言われてきています。

結局は、アタッチメントの機能、子どもが怖い、不安だというようなネガティブな感情を持った時に、一番守って欲しい時に、守ってもらおうという体験が欠落してしまうこと、これが虐待問題の一番の深刻さとしてあるとも言えるのかもしれません。そして、その虐待というものがなぜ生じてしまうのか、いろいろな要因が考えられるかと思います。実際に虐待をふるってしまう養育者も、みんながみんな、同じような性質を持った養育者とは考えられない。いくつかのタイプ分けをして考えていかなければいけないということも言われていて、それこそやはり自分自身が小さい頃に深刻に虐待にさらされてきているということ、これは、ある種、しっかりと子育てをされるという経験の希薄さが自分が親になった時にやはり子育てができないという虐待の世代間伝達とか世代間連鎖が指摘されています。昔は心理学の中では、ほぼ100%それがあると言われた時代もありますが、最近の研究では、それが大体30%プラスマイナス5%ぐらいの確率で生じると言われるようになってきている。しかし、30%プラスマイナス5%といっても、一般の虐待の発生率の5、6倍以上にも相当する高い率ですから、やはり自分自身が虐待を受けることが虐待を生み出すことの要因の一つとしてあることは確かなことであると思います。

ただ、それだけでは考えられないものがあって、実は、今日、ジョイントネスのところで、少しお話をしようと思っていたことの一つに、早産の子どもとか低体重で生まれてくる子どものことがあります。もちろんそうした子どもさん自身にいろいろな発達上のリスクが最初からあるわけですが、深刻なのは、持って生まれたリスク以上に、それが一つのきっかけになって二次的、三次的にいろいろな発達上の問題が引き起こされていくことです。我々心理学者であったり、小児科医の先生であったり、実践をする立場の人は、元々持っている難しさ以上にそれが二重にも三重にも深刻なものにならないようにするためにはということを考えなければいけないと思います。実は、早産の子どもさんにおいては、先ほど

申し上げたジョイントネスが稀薄なことが、時々養育者の子育てへの動機付けをくじいてしまうということが生じると言われています。一つは、早産で生まれてきた赤ちゃんは、先ほど述べた赤ちゃんらしさや赤ちゃんぽさが、満期産で生まれてきたお子さんよりも稀薄なことが知られています。稀薄というのは、少しやはり、お子さん自身の顔つきとか身体つきのかわいらしさの点からいうと、若干それが少なく、その分だけ養育者の気持ちを引きつける力が弱いと言えるかもしれません。そして、感情的な反応性も乏しいことが知られています。親御さんが話しかけても、それに対して反応することが少しばかり乏しいところがあって、そうすると親御さんの方は、こんなに一生懸命いろいろと話かけても分かってこない、甲斐がないとつい思ってしまうようになる。最初の内は、これだけがんばっているいろいろやっただけなのに、でもがんばり方が足りないのだとお母さんの方は自分を責めていく。でも自分を責めきれなくなってくると、これは応えてくれない子どもの方が悪いのではないかと徐々に子どもに対して辛く当たり始める。これは、あくまでも統計で明らかになっているということで、そしてまた、多くある要因の一つとして受け取っていただきたいのですが、やはり、低体重出生とか早産は、虐待のリスク因子の一つになるということです。これも実際、いろいろな統計から明らかになってきていることです。もちろん複合的な要因がありますので、一つにまとめていうことはできないのですが、そういうことが言えます。

小林：戦後豊かなアメリカの社会で虐待が増えたのですが、これは、未熟児医療が進歩したからという考え方がありました。それでクラウドとかケネルが母子相互作用という考え方を出したのです。つまり、インキベーターの中に入っているから、お母さんにとって、赤ちゃんを抱く機会がない。その母子相互作用の機会がないために、先ほど一色先生から話が出ました母親の子どもに対する愛情、子どもの母親に対する愛着、心の絆が出来上がらないという考え方になってきたわけです。では、未熟児医療が日本でも進歩してきたのも、これは70年代に入ってきてからだと思うのですが、やはり日本でも、虐待問題が小児医療の現場に現れるほど増えてきたのも、その当たりの年代です。豊かな社会の影の部分として、こういう問題は捉えないといけないのではないかと考えます。ですから豊かな社会の中で、その影を消すためにはどうしたらいいのかを考えないと日本はたいへんなことになるのではないかと思います。

一色：ありがとうございました。お二人の先生の議論を深めさせていただきました。ここからは、ご質問、コメントを伺います。何かございますか。

一般 A：とてもいいお話をありがとうございました。先ほど、虐待のお話でしたが、昨日テレビで優しい虐待の特集があって、見ていてとてもショックでした。コメントも一生懸命しているお母さんに対して、狼狽するような感じで、ではどうしたらいいのだという納得感がなくて、一生懸命されているお母さんもうらっしゃるのに、本当に子どもに声もかけられなくなるのかと思ひつきました。先生方のコメントを伺いたいと思うのですが、お願いいたします。

遠藤：実は、私が所属している大学院で虐待不安傾向という言葉を作って、研究している院生の人がいます。虐待不安傾向というのは、自分が虐待してしまうのではないかと、あるいは、自分の子育てが他の人から見ると、虐待と思われるのではないかとというふうに、自分の子育てを信じられなくなってしまうという傾向のことです。その研究では、最近、そうした傾向を持つお母さんが増えてきているということです。これは、ある種、自分の子育てというのを、他の人との比較で考える傾向、例えば、誰かがこれが必要だといっているのに、自分はこれをしてあげていない、してあげられていないということは、この子どもにとっては虐待になっているのではないのかというふうに考えてしまう傾向だと言えます。他のお母さんがやっていること、テレビで言っていること、雑誌で言われていることを比較基準にして、自分の子育ての質を考えがちになってしまっているということが、もしかしたら最近、少し増えてきているのかもしれない。

ただ、そういうことと、今日お話をさせていただいたことを関連付けると、先ほどの情緒的利用可能性という考え方は、実は、親がこうでなければいけない、親としてこうすることが絶対に重要ですよという考え方はやめましょうということを言う中で生まれてきました。もっと言うと、感性というものは、親自身の特徴なのです。敏感なお母さん、敏感なお父さん、それに対して、情緒的利用可能性という考え方は、親だけではなく、親と子どもの関係の特徴なのです。例えば、2組の親子がいる。この親子の中で、親だけを観察する。そうすると、一方の親は、盛んに子どもに対して話しかけをして、とても一生懸命子育てをしているように見える。一方の親は、じっとただ子どもが遊んでいるところを見ていて、あまり話しかけない。親だけを比較すると、先に述べたお母さんはたくさん働きかけをしてとてもいいお母さんのように見えますが、果たして、本当にそう言えるのか。実は、子どもの方も含めて、見ていけないといけないのではないのか。実は、その2組の親子の例で考えると、一方のお母さんは、子どもに対してあまり話しかけていない。けれども、子どもの方を観察していくと、子どもの方は、一つのことにとても夢中になって遊んでいる。夢中になって遊んでいる時に、お母さんは敢えてそこで話しかけない方が普通だったりします。要するに親子という単位でみると、子どもが何をしているかに対して、親の行動があるわけですので、他の親がこんなことをしているのに、自分はしてあげられていないというように、他の人との比較で何かを考えるということよりは、自分の子どもとの関係の中で、子どもがこのように反応してくれた。自分がこんなふうにしてくれたら、昨日よりは、ちょっとこれができるようになった。つまりは、自分と子どもの関係の中で、そのお子さんなり、またそのお母さんなりの基準を作っていくということが本来大切なことなのだと思うわけです。しかし、今の少子化も関係しているのでしょう。一人の子どもに対して時間をたくさんかけられるようになってきた分、あれもこれも重要とつい考え、また世間でこれはいいと言われることをしてあげたいという気持ちが前に前にと先走ってしまって、その結果として、世間一般で言われているところの基準から自分のことを不当にもとても厳しく見てしまったりすることが生じてきてしまっているのかもしれない。一生懸命さが、裏目に出てしまうだけに、実は、逆にすごく、もったいないという気持ちもあるわけです。何とかその一生懸命という気持ちを本当の子どもの発達というところにプラスにつなげるために、どういうことができるのかを我々は考えなければいけないような気がします。また、直にお子さんに関わっている方は、そういうことを少し考えなが

ら子どもや親御さんのことを見つめてくれればと思います。

一色：他にいらっしゃいますでしょうか。

一般 B：今日はありがとうございました。奈良県橿原市で子育てサポートグループの活動をしています。遠藤先生に伺いたいのですが、錯覚があって、脱錯覚に向かうプロセスが子どもの発達を促すというお話だったのですが、私も4歳と2歳の子を持つ親ですので、非常に参考になりました。ただ、今の虐待問題が、出てきている現状を、虐待をする親たちに錯覚そのものが欠落していたとも考えられるかなと思いました。いずれ、子育てをしていく中で、例えば、虐待をした、それで子どもを児童相談所に引き取ってもらって、その後もう一度親子関係を修復する時に、もう一度錯覚という段階から戻れるものなのか、それとも、戻らずしてまた、新しいプロセスを歩むものなのか、それとも、錯覚から脱錯覚のプロセスは、健全な発達を促すに当たって必ず通っていかないといけないのかということが一つ目の質問です。もう一つは、先ほどおっしゃられたように、虐待において、身体的なケアよりも、子どものころにあったケア、親との関係をうまく築けなかったという傷つきが問題になるのではないかという指摘がございましたが、そこで私はいつも思うのですが、お母さん、お父さんの感情が置いていかれている気がしました。そのあたりは、先生の子どもの発達とは関係ないことかもしれませんが、それは親が子どもの幼少期における、親とのアタッチメントがうまく作用していなかったからこそ起きる問題、連鎖反応として起きているように思うのです。その2点に関しての見解をお聞かせいただけますでしょうか。お願いいたします。

遠藤：ご質問とともに貴重なご意見をありがとうございます。錯覚ということの関連で虐待を考える時に、先ほど申し上げた通り、虐待をする親御さんというのは、みんながみんな必ずしも一通りの性質を持っているわけではなくて、やはり何通りかのタイプの方がいます。これを前提にして考えなければいけないと思うのです。一つは、まさに錯覚に浸れないことが根本的な原因になっている場合もあります。例えば、子どもを自分の身体から出た異物のように思ってしまうというようなケースは実際にあります。赤ちゃんがこんなことを思っているとか、自分を必要にしていると思込めないことの問題性が非常に際立っているようなケースもあるわけです。ただ、一方では先ほどのご質問にもつながるところかもしれませんが、錯覚というものにある種浸り続けてしまう中で発生する虐待もあるように思います。要するに、赤ちゃん、子どもが現に何を自分に求めてきているかということ以上に、自分がよかれと思っていることを重視して、結果的にそれに子どもを従わせるという中で、子どもが思い通りにならないと、それに徐々に耐えられなくなって虐待的な行為を子どもに向けてしまう。やはり私のところにいた学生さんで母性愛の研究をしていた人がいます。正確に言うとも性愛そのものというよりも、母性愛を信じる傾向の研究をしている学生さんがいました。実は、母性愛を信じる傾向が豊かなお母さんは、自分が期待している通りに子どもの発達が進んでいる時は、とてもいいお母さんなのです。けれども、同じ母性愛を信じる傾向が高いお母さんだけれども、自分が思っているように子どもが育っていないと思いはじめ

と、要するに、自分が期待していたものに子どもが全然応えてくれないと考え出すと、とてもネガティブな感情を子どもにぶつけるようになるというのです。だから、まさに母性愛というのは、両刃の剣みたいなところがあって、ある意味とてもうまくいくと子どもの発達にプラスに働くところがあるけれども、しかし思い通りにならないと焦りを感じ始めたり、誰かとの比較で自分ができないお母さんではないかと思ひ始めたりする。すると、そうした気持ちが一転して、マイナスの方向に転じてしまうようなところがあるようなのです。実は、錯覚に浸れないことで生じる問題、錯覚というものを不自然な形で持ち続けようとする中で生じてしまうような問題、虐待にはいろいろなパターンがあると思います。多分、それごとに、きめ細かくケアをしていかなければいけないと思います。

やはり、普通のプロセスを考えた時に錯覚を経て脱錯覚に至ることの大切さは変わらないと思います。結局のところ、錯覚、つまりは夢中になるというか楽しくてしょうがないという経験を子どもとの間で持てること、まずはこれが大切だということです。しかし、それがずっと続くのはおかしいわけで、子どもが大きくなるにつれて、今度は、子どもが主張してきたことに対して自分はそれを聞けないとか、あなたがそこまで言うのであれば聞いてあげましょうと、子ども自身の気持ちにちゃんと向き合う。この脱錯覚が必要になります。子どもをきちんと一人の人間として扱うこともおそらくは、子どもといてとにかく楽しいという、その子育てに夢中になる体験が前提にないと中々うまくいかないところがあると思います。だからもちろん、これは、ケースによって違うと思いますが、やはり、楽しいという体験、子育てをしていく上で、この子どもといったらこんなに面白いことがあるのだ、楽しいのだ、この楽しみを経験できないでいるとすれば、それを体験できるようにするというのが、一つの支援の形として重要であるのではないかと個人的には思います。

二点目のご質問の件ですが、もちろん、今日私の言葉が足りないところがあって、すべてに関してお話をすることができなかったのですが、やはり、よくこれも虐待の世代間伝達、世代間連鎖の中で言われることですが、虐待をする多くの養育者は、ご自身がとても怯えている、自分の過去に怯えている、現実の例えばご主人に怯えているとか、いろいろなケースがあるのですが、その怯えが、結果的には、自分の子どもに接する時には、子どもには怯えさせる体験として伝わってしまう。実は、この怯え／怯えさせるという中で虐待が発生してしまうということが言われたりします。そういうふうに怯えたり、自分が不安がっていたりするということから言えば、本来は、養育者自身がケアされなければいけないということがあると思います。実は、今日、お話した中に、ほどほどとか移行対象とか、ウィニコットさんの話がたくさん出てきたわけですが、あのウィニコットさんの有名な言葉に、英語では、「Holding Environment」抱っこ環境という言葉があるのですが、これは子どもだけでなく、親にもよく適用される言葉で、親の方をやさしく抱きかかえてあげられるような環境が実はとても大切なのではないかと思います。親を心理的に抱っこするという支援のシステムが欠けていることが、虐待を深刻化させたり、発生させやすくしてしまうことがあるように思います。ですから周りにごく自然に話ができるような状況があることは大きな強みになるでしょう。例えば養育者に虐待をしてしまうのではないかという不安傾向があるような場合に、そうではないよ、誰でもそんな時はあるよそれを相対化してくれる人、気持ちの上での抱っこをしてくれるようなシステムが人間関係の中に存在するというのが、おそらくとても

大切ではないかと思います。今は、孤立化する育児が深刻化していると言われることもあります。一人ひとりが子どもの責任は全部負わないといけないと思ひ込んでしまう中で、気軽に子育てのことを他人に聞けなくなってしまっている。あるいは誰も教えてくれなくなっている。そういうふうな状況がやはり虐待のような問題を生じさせやすくなっている一つの背景としてあるのではないかと思います。そういう意味では、親御さんを抱っこするという環境をどのように作り上げていけるのかということについて考えることも大切だと思います。

一色：他にいらっしゃいますか。

一般 C：アタッチメントという言葉を受着と訳された方は、どなたなのか、私の家内から年末が近づくとも掃除機のアタッチメントの箱を開けてとよく言われるのですが、そのアタッチメントを受着という言葉にされた方はとても偉いと思います。

遠藤：もちろん他の先生が訳されたのですが、アタッチメントを受着と訳されたのは、今日のパワーポイントの中では、もともとボウルビイさんという方が書かれたアタッチメントの本は3巻本になっていて、その後日本語に訳されたのは、黒田実郎先生で、その黒田先生が受着という言葉が使われています。もしかすると、その前の段階で、アタッチメントを受着と訳された先生がいらっしゃるかもしれませんが、私が理解するところでは、このボウルビイのアタッチメント理論を翻訳された時に黒田先生が受着という言葉に置き換えられたのかと思います。ほどほどとか程よいも、おそらくは牛島定信先生という慈恵医大にいらっしゃった先生が訳されたのかと思います。

一般 C：もう一つ伺いたいのですが、アタッチメントの種類、ストレンジ・シチュエーション、アンビバレント型の方がアスペルガーの方に多いのかなどは、研究された方はいらっしゃるのでしょうか。ストレンジ・シチュエーションでいろいろなタイプに分けられた中で、正常な方は、アスペルガーの方は、この形が多いなどの研究はされていますでしょうか。

遠藤：発達障害とアタッチメントの関連性の研究は最近増えてきております。今日は時間がなくて、アタッチメントの個人差の話はできませんでしたが、アタッチメントは、一般的にはストレンジ・シチュエーション法という方法で類型化されるもので、例えば親御さんとの間に距離をおきがちなお子さんさんのアタッチメントのタイプを回避型、怖いときにはくっつくけれども、安心感が一度回復されると一人で遊べるというアタッチメントのタイプを英語では「secure」、日本語では安定型と言います。そしてもう一つが今、ご指摘のあったアンビバレント型ということになります。昔は抵抗型とか両価型と言われたこともあったようです。それぞれの説明を本当はしなければならないところだと思いますが、今日は時間がありません。

発達障害、自閉症とかアスペルガーの子どもさんにどういうアタッチメントが多いかという研究は、日本ではそんなに盛んには行われていませんが、欧米では、たくさん行われています。先ほど、アンビバ

レント型のお話がありましたが、実際、割合、自閉症とアスペルガーの子どもさんに関して、一般的に多いだろうといわれているのは、むしろ回避型です。距離をおいてしまう方です。ある意味、自閉症の子どもさんは、他の人にあまり関心を持たないということからすると想像しやすいと思うのですが、人に対して執着しない、くっつくこうとしない。それが回避型というタイプに相当するのではないかとということが言われてきていました。最近になってもっときちんと自閉症やアスペルガーの子どもさんの親子関係を研究していくと、実は確かに普通一般の定型の子どもさんと比べると親に対して頻繁に泣いたり、アタッチメント行動を起こしたりしないけれども、そのお子さんなりのアタッチメント行動がきちんとあることが分かってきています。確かにストレンジ・シチュエーション法のような類型で考えていくと、回避型に分類されがちだけれども、自閉症の子どもさんもアスペルガーの子どもさんもアタッチメントをきちんと持てることが言われるようになってきています。但し、普通の子どもさんとは見え方が違うので、ついこの子どもさんは、親がいなくても平気なのではないかと思われがちだけれども、実はそんなことはなくて、お子さんなりにとても混乱した時は、お母さん、お父さんなどがやはり特別な存在としてあります。

アスペルガーの方の自伝がたくさん出版されています。アスペルガーの方の中には、類まれなる才能をお持ちの方もいらっしゃいます。その方の伝記の中で親子関係を研究されている方もいます。大人になってもアスペルガーの親子関係においては、お母さんの存在は、とても大切なまずっとあり続けるということが伝記研究から明らかになっており、要するに傍から見ると少し違うと思われる場合でもその子どもさんから見ると、やはりお母さん、お父さんは特別な存在である場合が多い。そういう意味ではきちんとアタッチメントが成り立っていると言われてきています。

一色：他にいらっしゃいますか。

一般 D：神戸市内の保育園に勤める者です。漠然とした質問なのですが、お二人の先生に今の時代の保育園に思うことやこういうことを大事にして欲しいということがあれば、伺いたいです。今から20年から30年前に朝7時から夜7時までの保育園というのができまして、その当時、私は保育士として働いていたのですが、本当に常識外だったのです。保育園は幼稚園を追い越せという時代でもありましたし、行事みたいなものに、一生懸命取り組む時代だったのですが、その頃私が勤めていた園の園長は、価値観を変えまして、小林先生の本を皆で読みあったり、ボウルビーをもう一度読み直そうということで愛着やアタッチメント、自分を律する自律を何かメインで持っていけないかということで、取り組んでいました。今は私のいる園も、週の半分は、夜8時、9時まで子どもがいますし、どんどん保育園自体が大人の都合のいい利用しやすい保育園となり、以前よりは、母子関係が中々声に出して言いくい時代のような気がしますし、保育園全体も何だか、苦情解決やいろいろなことで伸びやかさがなくなっているような気もしています。やはりこれは大事にしなければいけないのではないかとことがありましたら、教えていただきたいと思います。

小林：保育は社会システムとして、確立した子育ての重要なシステムと思います。これは、昔は保育に欠ける人のためにする保育であったけれども、そうではないと思います。そんなことを言ったら、女医さんの保育をしなければいけない今の保育園は何をしているのかということになってしまうわけです。私はそういう意味で、社会システムとして確立した子育てのシステムであると考えています。

二番目は、子育てという立場から見ると、保育園の先生方も親の子育てを支援するような体制をつくる必要があるのではないかと思います。なぜかというと、子育てを受ける側は子ども一人です。ところが、保育園に行って、家に帰ってきてまた別になってしまうというのではなくて、むしろ親との時々勉強会をして、子どもさんをこのように育てたほうがいいのではないのでしょうかという話し合いをして、積極的に親の育児を支援するような園にならないといけないのではないかと思います。

三番目は、幼保一元化を早く遂げる、一元化をするというよりも、年齢別に保育と幼稚園とを分けた方がいいのではないかという気もしますし、その辺りはもう少し勉強しないとダメですが、私も中曽根内閣の時の臨教審の委員をやっていた時に、幼稚園の先生たちが幼保一元化を猛烈に反対してキャンペーンに来たのです。ともかく幼保は一元化しないという前提で教育システムを考えましようと話してあの答申を出したのです。その時に感じたのは、幼稚園の先生方が、保育に対する蔑視を強く感じました。保育も、幼児教育の中の一つのパターンとして取り上げて、一つにまとめてあげた方がいいのではないかと最近を考えております。

遠藤：小林先生のお話がすべてお答えになっているかと思います。先ほどのアタッチメントのところでも、お話をしかけましたが、実は、怖い時に保護をするのがアタッチメントです。でも実は保護するからこそ探索活動ができる。探索というのは、言い換えると遊びです。でも、遊びは、子どもにとっては学びです。保育と幼児教育を別々に考えがちですが、実は子どもの学びにとって、一番重要なことは、遊びの中でどれだけ自発的に学んでいけるかということだと思います。それをどれくらい豊かに保障できるかということが、きちんと保育の中で考えられなければいけないことだと個人的には思っております。

小林先生のお話の中で、保育所というところが、子育てをしっかりとサポートできるような体制をというお話がありましたが、このお子さんの育ちのここが問題だから一緒に考えましようという、子育て、子どもの発達にプラスに働くような子育て支援、親の支援を考えていく必要があるかと思います。今日の題目でも、子育てと子育てを並べているわけですが、子育て支援となると、ただ親に対するサービスの提供ばかりの話になってしまいがちですが、そうではなくて、本来、子育て支援は子育て支援のためでなければいけない。子育て支援にかなう子育て支援というのを、本当はきちんと考えなければいけないのに、どちらかというと、親の都合で、例えば長時間預かってもらえると楽だということだけで、社会が動いてしまっているようなところがあるように思います。本当はそれは子育てのための子育て支援にはなっていないくて、子どもがきちんと育つために、どうやって子育てを支援していくか。先ほどの小林先生のお話ですと、あなたの子どもさんは、もしかするとこういうところで躓いているかもしれない、それこそ、子育てのための子育てのサポートをするというお話だったと解釈しましたが、まさに子育てのための子育て支援、これが本当にきちんと考えられなければいけないところがあるのかなと思ってい

ます。

11月に東京で「乳児保育の危機を考える」というシンポジウムを1日かけて行いました。それは、研究者が主体になったものではなくて、200人ぐらいの保育士の先生方が集まって、乳児保育が危機的な状況にあるのではないかと、保育の制度がどんどん変わっている状況の中で、たくさん子どもを長時間預からないといけない。そういう中で赤ちゃんの保育の質をどうやって保証していけばいいのかということで、とても危機意識を持っていらっしゃる。そうした先生方が集まって、様々なテーマに関して、制度の改革を待つ前に自分たちでできることは何かということを考える集会でした。かつて、子どもの発達の中で、特に乳児保育に関するちょっとした蔑視のようなものがあったことも事実で、赤ちゃんは生活の世話をすればいいのだからという理由で、専門性の低い、アルバイトのような方でも赤ちゃんの保育はできると言われた時代もあったわけです。しかし、実は、赤ちゃんの保育ほど難しいものはない。人間関係の基礎とか発達の基礎を考えると、最も専門性を必要とされるような領域だったりしますが、その大切さが十分に社会に認識されていないところがあるのではないかと、私自身、思いますし、また集まった先生方もそうおっしゃっておりました。そういう意味で、保育の質を園内研修などを重ねて自律的に高めていくことが必要になってきていると思っています。

一色：今日はいつもより長くディスカッションいたしましたので、この辺りで終了したいと思います。私自身も、皆さん方のお話を聞いていて、特に少子化時代、一生懸命さが裏目に出してしまう。そういう話を遠藤先生がされましたが、そのためには、子どもの発達のために何ができるかをもう少しきっちり考えていく必要がある。今、その中の一つとして、子どもの学びをどれだけ保育園、家庭で見守って支援していくことができるか。そういったことが大切であろうと思います。子育てを楽しむ社会、そういう組織になって欲しいと感じました。本日はどうもありがとうございました。